



除夜の鐘を大晦日の夕方につく理由

年末年始になると、除夜の鐘にまつわるニュースが目につくようになります。いくつもある報道のなかで興味をひいたのは、「鐘の音がうるさく」との苦情が寄せられ、長年続いてきた年越しの鐘を断念したという記事でした。

幸いに松岩寺には「うるさい」というクレームはまだ届いていません。苦情は聞かえてこないのですが、深夜に鐘をつくというのは、骨が折れる行事です。コロナ禍前は、寒風のなかで参拝客に甘酒を接待して、百八の鐘をつきおわるのは、早くても午前一時をすぎずでしょうか。

だからといって、元旦は寝坊しているわけにはいかない。朝六時に暁鐘をついて、いくつかの新年の行事をこなします。若い時はへいちゃらだったのに、齢を重ねてくると寝不足がたえます。そこで、除夜の鐘をもっと早い時刻につけないかと怠け者は思案しました。

定例行事を変革するには、誰もが納得する説明が必要です。「任職が寝不足になるから」では少し格好悪い。もう少し気のきいた言い訳はないかと行きついたのが、古典落語の『芝浜』です。こんなあら筋です。

酒におぼれて働かない魚屋の勝五郎は、芝の浜で思わぬ大金を拾う。これで働かなくていいと喜ぶ勝五郎に、女房が機転をきかせて、あれは夢だったと言いくるめる。心を入れ替えて酒も断って働いた三年目。畳を入れ替えて借金取りも来ない、しずかな大晦日の夜を

過ごす女房が亭主に福茶をすすめます。その時、除夜の鐘が聞こえてくる。今でいえば、晩の六時か七時ごろだという。

あるいは、日本民俗学の創始者・柳田國男が当時の人は、「日の入りとともに一日が終わる。除夜の鐘をきいては昔からの日本人の年の取り方ではない」（『柳田國男全集第二十巻』筑摩書房）と指摘しています。そして、ある歴史学者は「江戸時代において除夜の鐘が撞かれていたという事実自体が確認できない」と結論づけ、東京の浅草寺と寛永寺が除夜の鐘を正式につき始めたのは昭和二年十二月三十一日からだと断定します。ならば、今のような除夜の鐘はいつ、どのように始まったのか。歴史学者は次のように記述します。

「仮に、村などでの地域的な慣習、もしくは民間信仰的な行事などのひとつとして行われていた除夜の鐘という行事が、近代以降に広く全国的に広まったと考えられるのであれば、その方が自然とも言える」。

なあーんだ。除夜の鐘を大晦日の深夜につくのは、それほど長い歴史ではないのか。

去年も夕方五時から「金剛經」というお経を読みながら任職ひとり除夜の鐘をつきました。良い修行になりました。今年もそうさせていただけます。一般の方はつけません。

境内の北、旧中山道に面したところにある伝道掲示板の令和6年12月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。



blogから

十二月のことば
年くれぬ
笠きて草鞋
はきながら
松尾芭蕉

師走のことばは、松尾芭蕉の俳句です。貞享元年（1684年）、四十一歳の作。この年、「野ざらし紀行」の旅にでて、ふるさと伊賀へ帰ろうとしていた年の暮れによんだ句です。



直行したわけではなく、各地で句会をひらいての大旅行であったという。

そして、この旅を境にして、芭蕉の行くところ多くの門人があつまり、蕉風が確立したというから、ちよっとルンルンな旅だったのではないかとでも句では、「年が暮れようとしているのに、旅姿」という寂しさを演出している。なんて言ったら俳聖に叱られるだろうか。

さて、十月に出版した『またまたおうちで禅』で、

一句だけ芭蕉の句を引用しています。

歯にあたる身のおとろひや
海苔の砂

「野ざらし紀行」から七年後、
四十八歳のときの句です。

この句をよんだ三年後に、五十一歳で夢は枯れ野を駆けめぐり、大坂で客死した芭蕉です。

海苔に砂がまじっている、老境の歯にあたるというのですが、芭蕉の頃は天然のノリを集めて押しひろげて乾燥させたらしい。だから、砂がはいってしまうわけです。そんなワイルドな食品から、臨済宗中興の祖と仰がれる白隠禪師（一六八五〜一七六八）に思いをいたすという『またまたおうちで禅』。後輩住職が「突拍子もない発想」と褒めて（？）くれたけれど、おもしろいよ！